

コロナ禍での看護 エピソード集

明日の笑顔のために。



公益社団法人 神奈川県看護協会



会長選

01 NANA MAMA02



理事選

02 川口 あずさ03



会員委員選

03 なみなみさん05

04 西 由紀子06

05 つづみたつや08

06 森 美樹09

07 あお11

08 環境整備は看護の基本12

09 A.T14

10 YO15

11 なお17

12 さく18

13 コハク19

14 ゆうな20

15 鳥21

16 まいこ22

17 ささき23

18 とと24

19 小笠原 さより24

20 やのびの嫁25

21 kuro25

22 江橋 奈央子27

23 高橋 清27

24 のんさん29

25 まめ30

26 みっころ31

27 町田のひこにゃん32

28 佐藤 忍33

29 青木 真純34

30 野垣内 誠36

31 市川 菜美子37

32 武見 綾子39

33 温かい言葉40

34 6人でワクチン41

35 看護師で良かった a(^o^)o43

36 あー44

37 One For All,
All For One45

38 ひふみ46

39 あんみつ姫47

40 菅原 朝子49

コロナ禍での看護エピソード

会員委員会で募集をいたしました「コロナ禍での看護エピソード」に作品を応募いただきありがとうございました。この募集は、コロナ禍で「看護」に注目が集まっている今、実際に現場の看護職はどう頑張っているのか、看護業務をどのように工夫しているのか、頑張ったこと、嬉しかった事などを共感・共有をしたいと考え募集しました。

どの作品も現場での看護職の奮闘が感じられました。看護の原点に戻り環境整備や患者に安心感をあたえるという当然のことですがその大切さ、限られた物品の中での工夫、他職種との連携など医療関係者が一丸となり新型コロナウイルス感染症に立ち向かっていることが分かります。

今回の作品以外にも、看護業務で工夫していること、頑張っていることは多くあると思います。是非身近な方と共有していただき、これからの看護に活かしていただければと思います。

会員委員会 委員一同

このエピソードは私がまだ病棟主任をしていた2020年、コロナ禍が始まった第1波の頃でした。

患者Aさんは90代女性。一人暮らしで自宅に倒れているところを発見され当院へ救急搬送。肺炎と多発的な褥瘡があり入院となりました。親族は他県に在住の姪御さんひとりでした。

面会制限を始めたため緊急時以外の面会は中止であり、当院はタブレット等の使用はしていないため患者さんとご家族は顔を合わせることができない状況でした。

入院当初はAさん自身が携帯電話を使用し姪御さんに連絡をしていましたが、徐々に病状が増悪し連絡を取り合うことが出来なくなつて

いきました。スタッフの二人がAさんがいつも電話で話していたことを思い出し、本人の電話を使用して姪御さんに電話をかけるとAさんは声がかすれて会話できませんでした。しかし姪御さんは電話越しに声をかけて励ましたり、Aさんが好きな歌を歌って下さりました。それを聞いているAさんは頷いたり、笑顔を見せていましたが、電話ではその表情を見ることはできないため看護師も会話に参加し、「今、頷いていますよ」「口を開けて笑っていますよ」等Aさんの表情を伝えるようにしました。

一人の看護師から始まったこの二連のケアは次々と夜勤者に引き継がれ、夜勤帯の20時頃になると担当看護師が電話をかけて毎日ご家族との時間を過ごすことができました。Aさんが亡くなる2週間ほどの期間ではありましたが、コロナ禍で面会もできず、何もしてあげられないと思つていたご家族の無力感や家族に会えないAさん

の孤独感に対してケアを行うことができただけではないかと思っています。

夜勤帯の忙しい時間にも関わらず看護師はその時間に合わせて他の受け持ち患者さんの観察やケアに入り、お互いが声を掛けあいながら勤務する様子は非常に頼もしく、スタッフの成長を垣間見る機会となりました。

Episode

02

川口 あずさ

(経験年数12年)

私のコロナ禍のエピソードは、「真夏の暑さについて」です。気温が上昇する夏場にPPEを着ている事がとても辛かったと印象強く残っています。

感染症対応のため換気もできず、スタッフは暑いが空調の温度を下げると患者は寒いと訴えていました。不織布のPPEが不足したコロナ禍当初は、消耗を少なくするためにビニールエプロンを着て水平感染対策を行っていました。PPEの2枚重ねは、熱がこもり身体からは大量の汗が吹き出しました。マスクで蒸れた顔は化粧が浮いて、隠していたほうれい線がくつきり見えてきます。毎朝、綺麗に整えた髪は崩れ、ユニフォームには大きく汗が染みていました。コロナ

禍前なら「絶対に見せられない」と思うような恥ずかしい姿でした。しかし、そんなことを気にする余裕もなく、水分補給すらできない危機的な状況でした。私の他にも、多くの医療者が同じような苦しみを感じていたと思います。

暑さ対策では色々として行錯誤しました。瞬間冷却スプレーを身体に吹きかけてからPPEを着ましたが、スプレーの効果が薄れると使用前よりも更に暑く感じました。常に涼しく感じられるような良い方法を考えていると、上司から保冷剤とベストの提案がありました。

しかし、お世辞にも可愛らしいとは言えず、しばらくは誰も着る人はいませんでした。それでも、私は快適さを期待して着用してみました。すると、PPEを着ていても涼しく快適に看護業務を行う事が出来ました。そして、みんなにすすめました。すると、1人、2人と着用する看護師が増えていきました。時にはおかしな格好

を皆で笑い合い、辛い状況でも笑顔になりました。厳しいコロナ禍でも頑張ろうという気持ちになりました。みんなで一丸となり、助け合い、辛いコロナ禍を乗り越えていこうと思えたエピソードでした。

なみなみさん

(経験年数14年)

コロナウイルスが流行り始めた冬、まだワクチンも接種していない時期でした。当時、コロナ患者の受け入れは行っておりませんでした。私が働いていた施設では、クラスターが発生しました。一人発生すると、次々に陽性となってしまいました。病棟閉鎖を行い、外来患者様の受け入れ停止、入院患者様の退院や転院禁止、スタッフの外出自粛など外部との接触機会を減らしました。陰圧管理できる部屋もなく、施設内で転院困難な患者様の管理を行っておりました。限られたスタッフ、気持ちはみんなひとつでした。早く終息してほしいと。

責任者は先頭に立って、感染に対しての知識の講習、ゴミ箱の設置、防護物品の確保、部屋の仕

切りわけ、スタッフのメンタルケア、患者様の健康管理など休む時間は無かったと思います。そんな姿をみて、私達スタッフはこの時間だからこそ患者様と向き合ったり、感染管理を学んだり今自分達ができることをやろうと協調性が生まれました。

クラスターは1ヶ月経ち終息しました。全員陰性の結果です。同じ目標に向かって、一人ひとりが対策を行ったことで得られた結果でした。施設の感染管理が認められた日だと感じております。その時の現場の雰囲気は今でも忘れられません。患者様とともにスタッフ皆で喜んだことを覚えています。施設内感染発生後、患者様自身が一番怖かったでしょう。コロナ陽性となった患者様が隔離部屋から戻られた時は、この施設内で悪化せず治療を行えたことがとても嬉しかったです。患者様の笑顔と感謝の言葉がとても励みになりました。同じ目標をもち、前向き

に一人ひとりが心がけることで物事は大きく変わることを実感しました。

コロナウイルスによる業務の大変さや辛抱はきつことこの施設でもあることでしょう。しかし、この時代だからこそ提供できる看護や、自分の看護を見つめ直す機会となり、対象者と深く関われる時間になるのではと思います。マイナスな考え方ばかりではなく、乗り越えた先に越えた分だけの何かがあることを信じられる経験となりました。

Episode

04

西 由紀子

(経験年数10年)

私は産科で助産師をしている。コロナ第5波のさなか、陣痛が来て入院した初産婦のAさん。妊婦健診で家族がコロナ陽性という情報を得ていた。入院時、Aさんの検査結果も陽性。当院ではコロナ陽性産婦の分娩対応はしていないため、母体搬送することに。しかし、搬送先を探すも断られ続け、当院で帝王切開せざるを得ない状況となった。手術室、感染病棟スタッフと協力し、無事に帝王切開で元気なaちゃんが誕生した。

帝王切開後、Aさんは感染病棟、aちゃんは産科病棟へ入院。すぐにでも産まれたのでaちゃんを抱きしめたいだろうに、フロアも異なり、ガラス越しの面会さえできない。Aさんが少しでも

aちゃんを感じられるように、aちゃんの写真を撮って、その日の体重やメッセージを書いてお渡しした。写真だけど、初めて見る我が子をととても喜んでいた。

Aさんの経過は順調で、咳や息苦しきなどの症状もなかった。それだけに、どんなにもどかしかったことだろう。aちゃんの写真を見るなり、崩れ落ちるように泣き出した日もあった。それでも、微力でもAさんの力になればと思い、aちゃんの写真を届け続けた。手形足形を取ってお渡しした時もあった。

その後、Aさん自身は元気だったものの、肺炎像が悪化し、今後急変もあり得るという状況になり、高次の病院への転院が決定。感染病棟のスタッフの協力を得て、aちゃんとi P a d越しに面会できた。初めての動いているaちゃんは、思ったよりも小さく見えたそう。Aさんが転院してからは、Aさんの夫が毎日写真を受け取りに来

てくれた。

退院後、再び当院へ来たときに「あの写真がなければ乗り越えられなかったと思います」と話されていた。Aさんにとっては辛い日々だったと思うけれど、幸い、aちゃんはコロナ陰性。あらためて、子が持つパワーの大きさを感じた。そして、離れていてもAさんはaちゃんのママだよという想いが伝わったかなと思えたエピソードだった。

つづみたつや

(経験年数10年)

私が共有したいコロナ禍での看護は、「地域で暮らす要介護者かつコロナ感染者の健康観察」です。

私は現在、保健所でコロナ感染者の疫学調査や自宅療養での健康観察、そして受診調整などの業務に従事している。感染症法による発生活にに基づき患者に電話し疫学調査を行います。届には本人が受診やPCR検査したことが、中には本人が受診やPCR検査したことを知らず症状も何もないと話される方がおり、更に氏名と住所が合うのに年齢が異なる「あれ？なにか話を通じないしおかしいな…」という方がいる。電話の後ろの方で声があるので本人は1人暮らしたと言うが何とか家族に電話を代わってもらうと、本人は認知症を患っており、先

日高熱で意識レベルが低下して家族が救急要請したことが発覚し、なにも症状がないというのは間違いであった。家族の方がいれば話は早いのだが、単身者や夫婦で認知症などの場合、本人の話だけでは症状や生活状況がよくわからない方もいる。このような方の調査をすると要介護認定されており何らかのサービスを受けていることが多く、訪問看護師やケアマネージャーなどの医療支援者から既往や日常の状況、日々のバイタルサインや症状を確認することがある。入院適応ではないコロナ感染者の家に毎日訪問している看護職がおり、ただ認知症というだけでは入院適応にはならず、コロナ感染者の健康観察や配薬管理、必要な看護ケアを通してその人らしい生活を自宅で送れるよう支えているのだ。コロナ感染をきっかけに虐待(高齢・小児)、障がい者、精神疾患や生活保護(手前)でギリギリの生活を送っている方が炙り出され

る。そのような方を支えて健康観察しているのは、訪問看護（コロナ患者の地域療養で行政の委託療養として介入）など地域で活動する看護職である。

メディアにはコロナ病棟やECMOなど超急性期が紹介されているが、もう少し地域で認知症や障がいを持つコロナ患者を支える看護職の重要性も注目していただければ幸いである。

Episode

06

森 美樹

（経験年数20年）

「コロナ禍の看取り」

世界中がコロナ禍となった2020年初期、コロナ陽性患者は閉鎖的な病室に長期間入院していた。その中でも高齢患者は予後が悪いケースが多く、病室で終末期を迎えることも度々あった。さらに感染対策上面会は禁止されており、コロナ陽性患者は家族と対面することなく亡くなっていった。コロナ病棟で勤務していた私は冷たくなった患者に「ごめんなさい」と声をかけながら納体袋のチャックを閉めたことを思い出す。

コロナ禍になり2年が経過した。コロナ疑いで緊急入院となったA氏は、入院後すぐに急変した。現在当院は、希望する家族に対し、終末期患者の面会を許可している。

家族は看護師と共に個人防護具を装着し、病室へ向かった。

「おじいちゃん、まだ手が温かい」。個人防護具を着用した家族は、患者の手を強く握り、何度も声をかけていた。そして家族が見守る中、A氏は静かに息を引き取った。息を引き取った後も、家族はしばらくA氏の手を握り続けた。 「おじいちゃん、今までありがとう。本当にありがとう」と涙を流しながら声をかけて病室を後にした。

個人防護具を脱いでいると、「最後に会えないと思ってたから、会えてよかった」と長男。「おじいちゃんとお別れできた」とお孫さん。A氏の最期に立ち会うことができた家族を見て、私も自然と涙が出てきた。

コロナ禍で世界の状況が大きく変化し、現在も孤独を感じながら多くの患者が療養生活を送っている。一方で医療従事者も様々な場面で葛

藤しながら患者の命と向き合っている。今回の経験は、感染対策でウイルスを遮断しても、患者と家族の繋がりは必要であると改めて感じる出来事となった。コロナ病棟における最善の看取りとは何か、これからも考えていきたい。

あお

(経験年数2年)

新型コロナウイルス感染症流行初期に、夫婦でコロナ陽性となり入院した患者がいた。私はどちらも受け持ちをしていたが、看護師である以上双方に双方の病状を伝えることは出来ない。そのもどかしさを感じながらも、日々最善の看護は何かを模索しながら看護をし、最後は感謝を述べられた体験があった。

夫婦のうち夫は重症、妻は中等症で入院となった。夫の状態は入院時から良いものではなく、日に日に悪化した。一方妻は中等症から徐々に回復し、退院となった。妻の状態改善とともに「夫はどのくらい悪いですか。話せる状況ですか?」と問われた。職務上話せないことを伝えたと妻は、「そうよね、わかっているんだけど心

配で」と涙した。上司にこの出来事を報告し、医師へ病状説明を依頼した。その後医師から、夫の病状とともに、自分は退院間近であることを聞いた妻は、涙しながら「私が退院するとき、一目でも夫に会えないですか」と話していた。当時は流行初期であり、感染対策もその都度検討していた状態であったため、上司、医師、感染対策室も含めて協議を行った。協議の結果、複数の看護師が妻の感染対策を支援することで面会可能となったため、妻の退院日に面会を行った。妻と一緒に夫の病室入室する看護師として、私が双方の受け持ちをしていたため任命された。妻は、手を握り声掛けをしながら涙された。規定時間になり退出しなければいけないことを伝えると、「退院前に最後に会えて良かった。これが本当に最後になるかもしれないけど。本当にありがとう」と何度も感謝を述べられた。

数日後、夫は死亡退院となった。私は出勤日ではなかったが後日上司から、妻が最後に面会できたことで覚悟ができた、自分の入院中に支えとなる看護師だったと妻が感謝を述べていたと伝えられた。今もその言葉が印象深く残っており、どのような状況でも模索することで患者・家族への最善の看護が出来ると思うんだ体験であった。

Episode

08

環境整備は看護の基本（経験年数11年）

ここはコロナのために作られた感染病棟。ああ、今日も慌ただしい。何のために頑張っているのかを忘れてしまうこともある。「コロナが無ければ」と毎日思う。素手で患者さんに触れられ、マスクをしなくてもよかった過去が懐かしい。目元しか見えない防護服。陰圧装置の音で、スタッフ同士でも声が聞こえづらい。不安のなか入院している患者さんに、安心を提供できるのだろうか。そう思っていたある日、ホテル療養していたAさんは、症状が悪化し入院した。Aさんは、「ホテルでの療養生活のこと、何でも聞いて」と気さくに話してくださった。Aさんの点滴交換に訪れた時のこと。早く良くなつてほしい願いをこめて他愛もない会話をした。目元しか見ええないし、こちらの表情なん

て伝わらないだろうと思いながら退室しようとした瞬間、Aさんが明るい声で、「いつも笑顔でありがとうね。こっちまで元気になるよ」と言ってくださった。部屋の出入り口に向かっていた私は、思わず足を方向転換させ、Aさんの元に戻り、「え！わかるんですか!?!目しか見えないからわからないと思っっていたんです。とても嬉しい!」と感情を表現してしまった。「わかるよ!大変なのに本当にありがとう!」とお礼を言ってくださった。

異動前に居た病棟で、毎朝スタッフ全員で「マスクの下は笑顔だよ、よし!」と呼称していた。余裕がなくて患者さんに笑顔で関われない日もあるが、この合言葉を思い出しては、弱った心を奮い立たせている。そのおかげで、患者さんを思う気持ち伝わったのだろう。

ここに配属されてから、防護服に身を纏われていても、伝わる看護は無数にあることを学んだ。むしろ、顔が見えないからこそ、看護の基本が活か

される環境である。患者さんとの会話が励みになる。ありがたい。慌ただしくても、何のためかを忘れずに今日も明日もマスクの下は笑顔で、コロナと戦い続ける。明るい未来がやってくることを信じて。

緊急事態発令と同時に、院内の面会が全面禁止となった。

政府、病院の方針に反するわけにはいかず、またクラスター発生は何としても避けなければならぬ状況だったため、小児科病棟も面会を禁止するという方針になった。

当初、新型コロナウイルスがどのような感染経路、症状、経過となるかわからず、災害拠点病院である当院は目の前にいる患者の治療に追われていた。

緊急を要さない検査や入院は延期するようにと、院内からお達しがあり、小児科病棟は入院患者が減少したため、一般床や感染対策室へ応援に行くこととなり、残されたスタッフで子ども

のケアにあたった。

面会ができないことで、親御さんの不安も増し電話の対応に追われた。

また、病室に入れないことを知りながら、子どもが好むおもちゃや本、タオルを持参されたり、突然来院されて半狂乱になったりした親もいた。

頭では理解しているが、すぐ目の前の我が子に会えないという苦しみ、さみしさ、不安など感情を訴えていた。

緊急入院で、原因不明の発熱、肺炎像がみられた子どもはPCR検査を実施し個室管理を行った。PCRの結果がでるまで、3日間を要し、看護師は最低限の訪室・FULLPPEの防護服姿での対応。小さな子どもが、個室で、3日間。大人でも耐えられない。

3日後、PCRで陰性であることが確認できたところで大部屋に移動したが、500円玉サ

イズの円形脱毛、床やベッド周囲には抜いたであろう髪の毛が散乱し、子どもの笑顔がない光景を目の当たりにした。子どもは、看護師が部屋に入るたびに看護師から離れず、その姿をみて看護師は疲弊し心を痛めていた。私たち子どもにかかわる全てのスタッフが、忘れられない光景であった。

多職種と感染管理対策室で協議をかさね、段階をおって条件付きの面会を拡大した。

コロナが災害とはいえ、子どもと親にとって安心して療養できる環境を整え、もう二度と、子どもと親を離してはならないと私たちは学んだ。

Episode

10

Y O

(経験年数30年)

私が勤務する病棟は、脳卒中専門病院の急性期一般病棟でしたが、今回のCOVID-19の感染拡大を受け、呼吸器内科や感染症の専門医師が常駐しない中、感染症病棟として開床しました。当初は軽症〜中等症患者の対応が前提でしたが、第5波では重症化した患者の受け入れ病院がないため、重症患者もみつつ、生活援助もこなう過酷な状況でした。治療の甲斐もなく亡くなられた方に対して「もつと出来ることがあったのではないか」と喪失感を抱き、くじけそうになった事もありました。病棟カンファレンスでスタッフの思いや考えを共有し、互いに支え合いながら乗り越えてきました。

さらにCOVID-19の家庭内感染により

「家族全員が陽性者だが、それぞれが違う病院に入院している」「入院適応があるのに、自宅に介護を要する家族がいるために、入院してられない」等の状況が多くなりました。その時、「だったら、当院で家族ごと受け入れよう」「家族が離れ離れなんて不安だよ」とスタッフ達から声が上がリ、看護師長にかけ合い受け入れを行いました。入院されたご家族が同じ部屋で「〇〇は大丈夫？薬飲んだの？」などと声をかけあったり、「この食事おいしいね」と話したりする姿を見て、家族が近くにいる安心感を提供できていると感じました。退院時には、満面の笑みで「おかげ様で安心して治療を受けることが出来ました。ありがとうございます。看護師さんたちも体に気をつけて頑張つて下さい」とうれしい言葉もいただきました。その後の外来受診で担当医師から「元気に過ごしている」と伺えた時は大変喜ばしく、スタッフみんなが「家族を丸ごと受

け入れることができ良かった！」と感じました。「患者・家族に安心して療養してもらいたい」と願い、コロナを理由に、「出来ない、やれない」と諦めないスタッフの思いをこれからも受け止めて発信しながら、出口の見えないコロナ禍をより良い看護を考えながら乗り越えていきたいと思えます。

「家族全員が陽性者だが、それぞれが違う病院に入院している」「入院適応があるのに、自宅に介護を要する家族がいるために、入院してられない」等の状況が多くなりました。その時、「だったら、当院で家族ごと受け入れよう」「家族が離れ離れなんて不安だよ」とスタッフ達から声が上がリ、看護師長にかけ合い受け入れを行いました。入院されたご家族が同じ部屋で「〇〇は大丈夫？薬飲んだの？」などと声をかけあったり、「この食事おいしいね」と話したりする姿を見て、家族が近くにいる安心感を提供できていると感じました。退院時には、満面の笑みで「おかげ様で安心して治療を受けることが出来ました。ありがとうございます。看護師さんたちも体に気をつけて頑張つて下さい」とうれしい言葉もいただきました。その後の外来受診で担当医師から「元気に過ごしている」と伺えた時は大変喜ばしく、スタッフみんなが「家族を丸ごと受

なお

(経歴年数30年)

発熱外来の部屋に呼ぶまでは患者さんとのやりとりは電話だけ。呼び入れられた患者さんは、防護服姿の医療従事者を目の当たりにして緊張状態に見える。そんな患者さんを迎える時は、「こんな物々しい格好でごめんなさいね」「決まりでこんな格好しなきゃいけないけど中身はいつもと一緒ですよ」と笑顔の声で話しかけ、防護服でも普通の看護師です」という雰囲気を出す様になっている。患者さんの中には表情が和らいで「はい、びっくりしました!」「大丈夫ですよ」とか、逆に「え!! コロナじゃないと思うんだけど!」と困惑している方もいる。どんな返事でも患者さんの言葉を引き出せるのは「よし!」と思える事だ。

「検査痛いですよね」と顔をしかめる患者さんには「ちよつと嫌な検査だけど優しくしますよ」と答え、検査から逃げ出したい子供には「お母さんの手を握ってパワーもらおうよ!」「よく頑張ったね!」と励まし、称え、笑顔の声で優しく明るく話しかける。

重症化してしまう方だけでなく、元気に治る方も多いのが感染症。不安だけが大きい。看護の根本といえるだろう「笑顔で優しく」、防護服の今は「笑顔の声で優しく明るく」を心している。小さな看護を小さな診療所で日々実践している。

さく

(経験年数2年)

昨年三次救急の救命センターから訪問看護の仕事に転職しました。クリスマスの日。朝から、ネグレクト気味の息子さんがいる人の容態が悪くなり、救急搬送に立ち会ったり癌末期のAさんのケアに入ったりする1日でした。

コロナ禍で面会ができないからという理由で、在宅で最期を迎えるという決断をしたAさん。お母さん想いの娘さん。同居されているご家族は心配であまり夜も眠れないとのこと。そんな時、どんなふうにご家族やご本人に寄り添い、安心して任せていただけるかを考えました。

事業所の上司に言われた言葉。「家族ならどんな些細なことでも気づける。私たちも利用者さんにそういうふうになるべき。家族、患者さん

と伴走するのが、私たち看護師」。そうか、ご家族と一緒に手を取り合って、ご本人の看護をしていくのが私たちの役割なのかと、そこで初めて気づきました。コロナと言う災害により、大きな決断をせざるを得ない患者さんやご家族がいます。そんな方達に何ができるかを一緒に考えることも私たちの大きな役割ですね。

コロナが日本国内で感染拡大し始めた頃、フェイスシールドやマスク、ガウンなどが不足していました。特に私の働いている病院は精神科単科のため、おそらく一般科ほど感染管理に注力していませんでした。このため、病棟で知恵を絞り、輪ゴムとラミネートフィルムでフェイスシールドを作ったり、カップをガウン代わりにしたり、またキッチンペーパーをマスクにして感染対策を行いました。この時、それまでにない程病棟の団結力を感しました。

また、神奈川モデルという、発熱などの自覚症状がある患者さんをコロナ疑い例として受け入れる病棟であったため、入院から病棟までの導線、ゾーニング、PCR検査の方法などを細かく

決めました。分かりやすくようにEXCELで図解し、病棟のあちらこちらに掲示したり、一人ひとりが使えるようなアンチヨコのような用紙を作ったりもしました。

そんな中、感染状況は悪化。少しずつ余裕が無くなつていき、さらに当時は世間からの医療者への厳しい目……。コロナのリスクが高い職業だから避けよう……。というような雰囲気も少なからず感じており、鬱々とした気持ちでした。

しかし、そんな中でも沢山の患者さんから、ありがとう、お疲れ様という言葉を頂いています。精神科の患者さんは多くが精神的な不調により入院されています。ご本人が一番辛いはずです。その患者さんから、ありがとう、お疲れ様という言葉が掛けて頂く意味を考えた時、不思議と気持ち晴れていきました。また、中には「コロナで世界は終わった。みんな死にました。だからもう生きてても死んでも同じなんだ

す」と、コロナの影響で強い精神的不調を訴えていた患者さんもいました。そんな方が治療を終えて笑顔で退院する時、看護の力、ひいては医療の力の素晴らしさを改めて感じました。

今後コロナが終息したとしても、新たなウイルスや災害が起こるかもしれません。しかし、今回コロナ禍を通して多くの学びを得たことは必ず今後へ活かせると前向きに考えています。

Episode

14

ゆうな

(経験年数4年)

病棟看護師です。コロナ禍になり、ご家族の面会が手術前後など特別な時以外できなくなりました。そのため、ご家族から患者さんの様子を聞かれる機会が増えました。久しぶりに面会できた際は、ご家族が想像していた患者さんの状態と異なり、驚かれる方もいます。そのため、いかにご家族へ現状報告をするか、今回のコロナ禍で学ぶことができました。

元々感染症が専門でしたが、コロナ前までは縁の下の力持ち的な立ち位置で、患者さんにもあまり必要とされることはなく、細々と活動を行っていました。感染対策にはコストもかかるため、中々理解されず大変な思いもしてきました。

しかし、コロナによって、そもそも感染対策とは何か？どのように空間を分ければ良いのか？という基本的なことを一般の方々および医療者でさえ分かっていないということを感じました。私にとつての基本は、他の人達にとつては知らないことでした。

今回、私はコロナに対して保健師として、コロナによる不安や疑問等を電話で対応してきま

した。その際、今まで自分が積み重ねてきた臨床経験や知識、科学的治験の蓄積を患者さんや家族、さらには一緒に働く仲間へフィードバックしていくことができました。中には、「医者でもないくせにお前に何が分かる」「保健師がそんなに偉いのか？医者より偉いのか？」「看護師と保健師はどっちが上だ？看護師を出せ」と言われることがありました。しかし、コロナという未知の対応についての不安を抱えているからその攻撃的な言葉ということが痛い程分かりましたので、誠心誠意言葉を尽くしていきましました。自分の持てる知識を伝える中で、何度も感謝の言葉を頂き、今までの自分の経験は無駄ではなかったと、感染看護を専門にしたのは間違いでは無かったと、多くの方々との交流から私の方が背中を押して貰いました。電話対応した方から、「やっと安心して寝られます」「今日、あなたと話が出来て良かった。ホッとしま

した」と仰って頂く度に私の方が元気を頂きました。

まだまだ先が見えないコロナ禍、たくさんの不安を皆さん抱えていると思いますので、相手の立場に寄り添い、自分出来ることをこれからもしていきたいと思えます。

Episode

16

まいこ

(経験年数9年)

今年の1月、働いている施設でクラスターが発生しました。

改めて感染予防対策の必要性や特に情報共有の大切さを実感しました。

陽性者が日に日に増えていき働ける職員が少なくなっている状況で、快く連勤を承諾していただいたケアワーカーさん。

ドクターXならぬヘルパーXになっているケアワーカーさん達がとても心強く勇気づけられました。

ささき

(経験年数3年)

大きな出来事ではありませんが、厳しい状況での感謝の言葉はジレンマを感じる私にとって温かいものでした。

私が勤める病院はがん専門病院です。コロナ感染者さんと直接関わることはほとんどありませんでしたが、面会制限など大きな影響を受けていました。終末期の患者さんでも一日1人、15分間のみの面会制限は例外ではありません。本来なら家族みんなでその患者さんを囲みたいはずですが、どうしても一緒に面会に入りたいご家族の希望をお断りするのは、看護師として本当に心苦しかったです。希望を断ったり、体調を確認したり、時間がくれば面会終了の催促をします。私はこれでいいのかなという気持ちでした。それでも、患者さん、ご家族はこんな大変な世の中で医療者は頑張ってくれて感謝していると言ってくれました。

Episode

18

とと

(経験年数25年)

病院に勤務していますが、近隣の学校から手紙を頂きました。

その中に我が子のお友達からの手紙がありました。

非常にありがたい文章であり、その子の成長も感じた手紙であり、温かいものを感じました。

Episode

19

小笠原 さより

(経験年数10年)

近隣の中学校から、病院職員へ励ましのメッセージが届きました。子どもたちの素直な気持ちや、感謝の思いが可愛く、嬉しかったです。

毎日、対応に苦慮しながら忙しくしていますが、頑張ろうという気持ちになりました。

やのびの嫁

(経験年数22年)

面会制限の中で親子の関係性を構築するに
は？

コロナウイルスに対して初めての緊急事態宣言が出され、病院内が全面的に面会禁止になつてから2年が経とうとしています。私の働く病棟は小さなお子さんを預かるため、特例として家族の面会が許可されています。院内の感染対策室と協働し、感染からお子さんとはスタッフを守りながら、家族との時間も守るという方法を手探りで探し続けています。世の中の情勢に合わせて、何度か面会制限をかけたたり、面会時間を区分したりと工夫し、現在まで「家族が面会に入った」事による感染は起こらず看護ができています。私たちの日々の感染対策と、そし

て面会に入られる家族の感染対策や協力のおかげだと思っています。

無事に退院でき、家族が自宅へお子さんを連れて帰る時、これまでに以上に良かったと思えるようになりました。

私はCOVID-19病棟で勤務している看護師です。

入院している陽性患者さんや疑似症患者さん、その家族は、症状のこと、医療従事者がマスクやアイシールド等の防護具をつけており我々の表情が見えないこと、隔離されており家族と面会ができず孤独感を感じてしまうことなど、様々な恐怖や不安に襲われていると思います。そのためケアだけでなく、コミュニケーションを通して不安や恐怖を少しでも取り除けるように努めました。

軽快して退院された患者さんや世間の方々から医療従事者に対して、感謝や激励の言葉をよくいただきます。

その言葉のひとつひとつが世界中で何万人も

の命を奪っているウイルスと闘う勇氣に変わっています。

これからも心を込めて症状や恐怖、不安と闘っている患者さんに寄り添っていきたいと思います。

1日も早く以前の生活が戻ることを祈っています。

Episode

22

江橋 奈央子

(経験年数28年)

私は今、救急最前線の総合病院から転職し糖尿病内科のクリニックで働いています。コロナ患者を引き受ける事はとても大変で重要ですが、基礎疾患を持ち重症化リスクに怯えるかかりつけ患者を心身共に支える大切さも日々感じながら従事しています。家族から糖尿病が悪いくらうつるぞと脅されると嘆く患者さんに、値を良くして跳ね返そう！と励まし、実際に数値が良くなるとこちらでも大喜びしています。

Episode

23

高橋 清

(経験年数22年)

私は精神科療養病棟に勤めています。作業療法(OT)活動が盛んで、OT中は患者さんの表情も良く皆が楽しんで取り組んでいます。病棟内のホールで行われる「梅の会」は、ADLの低下などで自主的なOT活動が難しい患者さんを対象としており、季節の話題や合唱、クイズなど車椅子に乗っていても楽しめる内容となっています。

第6波の新型コロナウイルス流行期に入り、院内でも新型コロナウイルス活動が中止を余儀なくされました。本来の役割を失った作業療法士は各病棟に配置され、看護補助者の手伝いをするようになりました。慣れない入浴介助など初めて経験することも多く、病棟スタッフの手際よい動きに翻弄されて戸惑っている様子も見

受けられましたが、とても助かりました。

業務が一息ついたとき、作業療法士は患者さんとコミュニケーションを図るなど、OTがなくなつて寂しい思いをしている患者さんたちの精神的な支えとなるよう努めてくれました。

私たちが患者さんのオムツ交換をしている最中、身体拘縮があるにも関わらず、看護師が多忙で関節可動域運動訓練（ROM）ができていない患者さんの存在に気が付きました。枕などを関節にはさみ屈曲が強くないよう努めています。効果は乏しいものでした。手指の拘縮により白癬菌に感染してしまうこともあります。私たちは「作業療法士さんにお願しよう」と思いつき、ROM訓練を依頼しました。作業療法士は快く引き受けてくれ、数人の拘縮のある患者さんに対応してくれました。患者さんは意思の疎通が難しい人でしたので、直接感想を聞くことは叶いませんが、表情で満足感を表現しているように思えました。

新型コロナウイルスは多大な禍をもたらしていて、暗い話題が多いこの頃です。その中でも、一生懸命取り組みんでいるスタッフの一面が見られました。これからも、患者さんに何ができるか考えていきたいと思えます。

のんさん

(経歴年数6年)

回復期リハビリテーション病棟で副主任をしています。回りハ病棟は在宅復帰を目指すため、多職種協働、ご家族や在宅療養チームとの密な連携が特徴の病棟です。コロナ禍となり、面会やカンファレンス実施、レクリエーション実施等の制限がある中、オンライン面会などのICT活用、三密とならないようなレクリエーション実施など、何とか工夫と調整をして在宅復帰率を保持してきました。

しかしオミクロン株の流行により、当院でもクラスターが発生。回りハ病棟でもコロナ患者様に対応することとなり、罹患していない患者様も病室のカーテン内での生活を余儀なくされました。回りハ病棟は生活機能の再獲得のため食事

はベッドサイドではなく食堂にて提供しており、排泄は基本的にトイレで行い、あらゆる場面がリハビリとなる病棟のため、スタッフも本来の回りハ病棟の機能を果たせていないことに憤りや疲労を滲ませていました。

そんな中での節分。少しでも季節を感じていただきたいとネームプレートに小さな鬼のお面をつけて出勤しました。配膳をしながら「今日は節分ですよ」とお面を患者様にお見せすると、「もうそんな季節だね」「かわいいね」と皆さん喜んでくださいました。ある患者様のところでも同じようにお見せすると、「まあ、節分…実は今日私誕生日なんです…」とおっしゃいました。ちょうど7歳のお誕生日を迎えられたとのこと。近くにいたスタッフを呼んで、カーテンの中でパースデイソングを歌い、ささやかな古希のお祝いをしました。後日トイレにお付き添いしている際、「先日はありがとうございました」と改めてお礼

をいただき、クリスマス前に転倒して手術となりクリスマスもお正月も病院で過ごし気落ちしていたところであったため余計に嬉しかったとお話してくださいました。

慣れないコロナ対応に追われ、患者様に十分な看護ができていないと感じる中、思いがけず患者様からいただいた「福」でした。

Episode

25

まめ

(経験年数28年)

今回初めてコロナの患者をみることになり、「いよいよか」という気持ちと共に、自分や周りの人の身を守るために細心の配慮をしながらケアを行っています。予測はしていましたが感染予防を意識した中での看護は精神的、身体的な負担があります。しかしスタッフの混乱がそれほどみられずケアを行うことができたのは、感染専門看護師をはじめ病棟スタッフ以外の援助が大きいと感じました。

みつこころ

(経験年数28年)

コロナ禍となり、入院すると患者さんはご家族との面会が禁止となった。その為当院では入院患者さんの写真を定期的に撮り、現状をお手紙に書いてご家族に送っている。状況がわかっとうれしいと、返信をくださるご家族がいて、それを皆で共有する為にお手紙を職員だけが通る廊下に貼り出している。

一時期は、10分間の面会ができるようになったが、原則は中止となっているので、お手紙を再開している。

入院患者さんの中には、ご自宅で最期を迎えたかと思っておりそれを受け止めるご家族も多く、ご自宅でのお看取りが多くなっている。

当院では在宅診療をしており、「畳の上で死に

たい」「最期は自宅で」とおっしゃる患者さんの希望をかなえ、ご家族に見守られて命が尽き、「いきった命にお疲れ様でした」と言える事がとても増えている。入院することがいけないという訳ではない。コロナ禍で面会できなくて寂しい思いをしている方や、自宅での看取りを希望されている患者さん方やご家族のために、医師、在宅看護師だけでなく、地域の訪問看護師、ケアマネジャーなどが連携して達成できていることに注目したい。当たり前のように行っているが、これは当たり前前ではなく、みんなの協力、努力がなくては達成できないかと思っている。このことはとても素晴らしいことであり、そして感謝してもしきれない。そんな環境にいる自分は幸せだと思っ

町田のひこにゃん

(経験年数38年)

「Kさんには、とてもお世話になりました。感染して不安でしたが、何とか療養を終えることができたのも、Kさんのおかげです」。これは、新型コロナウイルス感染症でクラスターが起こってしまった施設が再開する際、感染対策の指導に行った時、私が施設職員の笑顔とともにもらった言葉でした。2021年2月のことでした。

私は、2020年2月から保健師の統括的役割を担いつつ、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、保健所に日々かかってくる住民、関係機関からの電話相談、発生届受理後の陽性者への支援。そして濃厚接触者の特定や集団検査の調整、検査結果の報告、その後の施設への感染予防策の指導や、管内医療従事者への精神的支

援など、保健所職員と地域の医療従事者、特に感染管理認定看護師とともに、チームで仕事をしてきました。

陽性者は不安な気持ちを抱えて保健所からの電話を待っています。感染してしまった自らを責め、日頃あまり付き合いない行政機関から何を言われるのか、これから自らはどうなるのか、どうすればよいのか、家族はどうなるのか、職場の人たちはどう思っているのか…不安は増大するばかりだと思えます。その中で、Kさんは、感染者であるその人の心の中の不安を安心に変えていく、そんな人の心に染み入る支援ができていたのだと思います。

私は、「陽性者への支援をできるだけ丁寧を実施するように」と、業務量が増加する厳しい状況であっても、保健師として大切にしてほしいことを繰り返し伝えてきました。これは保健師の先輩から、自らが叩き込まれたこと…。施設

職員からの言葉は、それを引き継いだということを実感した瞬間だった…。のだと思います。Kさんは、子育てをしながらがんばっている私の部下の保健師、残業もたくさんさせてしまいました。私の38年間の幕引きはコロナの中でしたが、最高のプレゼントをもらって、無事に定年退職できたことに心から感謝しています。

Episode

28

佐藤 忍

(経験年数25年)

コロナ禍でも多くのがん患者さんが入院し治療しています。面会が制限される中、「家族にも会えない、孤独だよ」と嘆く患者さん。だからできるだけ病棟をラウンドして、たわいもない話をしてお顔を見に行く日々。コロナ禍になつて大きく変わったのは、在宅で療養を希望される方が多くなったこと。これは、やはり家族と一緒に過ごす時間を互いに希望してのことだと思いました。可能な限りその支援をして、ご家族からは「会えないのはつらい、さみしい、かわいそすぎる。家で過ごせてよかった」と。面会ができないのは病院だけではない、施設でも同様。窓越し面会やオンラインなどの工夫をしながら対応しているが十分ではない。しかし、私

たち看護師が患者さんと家族の橋渡ししとなって努力しなければならぬ場面がこれから先もまだまだあると思う。患者さんに一番近いところにいる、私たち看護師の日々の小さな気付きや支えで患者さんと家族をサポートしていきたいと思う毎日です。一人ひとりの患者さんと家族の思いを大事にして…。

Episode

29

青木 真純

(経験年数15年)

横須賀市のクリニックで管理職をしている看護師です。2019年に武漢で発生した新型コロナウイルスは瞬く間に世界中に感染拡大し日本でも死者を出すまでに至りました。当初は得体の知れない未知のウイルスと報道され、横浜港に停泊したダイヤモンド・プリンセス号の映像は国民を恐怖に陥らせました。その後特定の病院で治療にあたるも感染拡大の一途を辿り、開業医でもPCR検査を行えるようになりしました。当院で発熱外来を行うことが決定した際、否定的な意見も出しましたが、幼い児童を抱えている方、持病のある方などが居られることや余剰人員がいらないことを考えれば自然な流れでしょう。しかし、実際に業務を始め

てみると患者さんからは感謝の言葉を聞くことが多く、「色々な病院に電話したけど断られて最後の頼みの綱がここだった、本当にありがたい」。診察は屋内で行うものの、検査は屋外で行うため「あなた達も寒いでしょう、お身体に気をつけてくださいね」などとこちらを労っていたこともあります。そのような言葉はやがて私達のやりがいや使命感へと繋がっていったのです。ナイチンゲールがクリミア戦争で感染症と戦ったように私達も戦いたいです。ピクトリア時代と違い医学の発達した現在でさえ感染症は撲滅できず戦いは永遠に続くでしょう。しかしペストやコレラ、天然痘など危機を乗り越えた微生物はいます。その日が来るまで私達は戦いたいです。

仕事をしていて幸せを感じるのは患者さんが元気に退院できた時ですが、今は同じ志を持つ同僚と巡り会えたことも付け加えたいと

思います。同じ目的、目標を持てる同僚と巡り会えたことは望外の幸せであります。先の見えない生活ですが、免疫力を高めるためにもたわいな話で笑い合い、適度に休息を取りつつ地域医療に貢献していきたいと思えます。

ある日の業務中、受付の方から突然の電話。患者様から「今日でリハビリも含めてすべてが終わりました。ここまでこられたのは、あなたのおかげです。ありがとうございます」という伝言を預かったと。私は「良かった」という気持ちと、感謝の言葉をもたらすことで、心が温かくなった。

その患者様との出会いは半年前、検査室だった。脳血管撮影のため検査台の上で横になった患者様は、緊張のためか血圧が高く、硬い表情をされていた。私は「緊張しますよね」と声をかけ、検査開始まで手を握った。

コロナワクチンの影響と思われる血栓が原因で脳梗塞を発症した患者様。症状の増悪を繰

り返し、病状が安定しない状況が続いていた。検査後、病室で「検査室でお会いしたの覚えてますか」と声をかけると、「あの時、手を握ってくださいだった方ですよね。すごく安心しました」と返答された。私と同じ年齢で、子供も同世代という共通点により会話が弾み、少しの間お話をさせて頂いた。私は手術室勤務のため、他患者様の術前術後訪問の際など、機会を作っては病室を訪ね世間話で盛り上がった。コロナ禍により面会は完全中止。幼い子を持つ母親としての心情を考えるだけで、胸が締め付けられた。ある時は、「本当タイミングよすぎるよね」と私の顔を見るなり、嗚咽交じりに号泣されて「私、頑張っているよね。大丈夫だよね」と、張り詰めた思いを私に爆発させたこともあった。

看護師は人の病気やケガだけに向き合うのではなく、人間そのものと向き合う仕事だと

私は考えている。短時間の関りの積み重ねではあったが、患者様と私の間には確かな信頼関係がうまれていた。その後、外来通院時に偶然に再会。「あなたってさあ、看護師になるべくしてなった人だよ」というお言葉を頂いた。コロナ感染症の影響による業務ひっ迫、精神的な疲弊がひしひしと感じられる中、どんな言葉より活力となる言葉だった。「元気に退院されてよかったです」と心から思った。

Episode

31

市川 菜美子

(経験年数21年)

私が画像検査室に配属になったのは、このコロナが蔓延する少し前のことでした。1日35件前後の、気管支鏡やERCPなどの消化管内視鏡検査・治療、その他透視下での検査介助を主にやっている外来部門です。異動後、業務にも慣れてきた冬にコロナが始まりました。「病院に行くのが怖い」と検査室に来る患者さんからも不安の声が多く聞かれるようになったのです。コロナ禍の医療・看護の多くは救急医療・病棟医療になります。現在は通院治療を受けている患者さんが多くいます。私達外来看護師がこの現状の中、少しでもその不安に寄り添える事が出来ないだろうかと思いを胸に話し合いながら対応を模索しました。しかし日を増す

ごとに、私達の防御態勢も強化され、N95マスクやフェイスシールド、ガウンによつてほぼ表情が見えない状況に変わりました。ある日気管支鏡検査に来た患者さんが、来室時から不安を強く話していました。恐怖心が強い検査である上、コロナ患者を多く受け入れている病院への不安も強く、このままでは検査が安全に実施できないと思いました。咽頭麻酔まで時間があつたので患者さんの不安に終始耳を傾けました。隣で話を聞く事に努めようと決め、思いを

只々受け止めました。患者さんは話すことで少しずつ落ち着きを取り戻し検査室へ向かう事が出来ました。検査中も体をさすったり、できるだけ声を掛け続けました。検査後、病棟看護師へ引き継ぐ際に、「ありがとう」と意識がはつきりとしないうち、言葉を貰えました。その後、退院の日に検査室へ足を運んで再度、「あの時、話を聞いてくれて安心できたの」と感謝

の言葉を伝えてくれました。本当に嬉しかった言葉でした。時間に追われがちな外来ですが、検査が遅れたら治療の判断や治療自体が遅れてしまう事もあります。今回安全に検査を受けてもらえた事が何よりも嬉しく、出来ることはとても小さい事です。目が合わせ、どんな小さな声も聞き逃さず、見えない不安に対する想いを受け止めて行きたいと感じました。

武見綾子

(経歴年数31年)

病棟に段ボール紙を二つ折りにしたカードが届きました。今日、息を引き取りそうな永田さん（仮名）の娘さんが、永田さんに会いに来た時に届けてくれたものとスタッフが教えてくれました。カードを開くと、「いつも父をみてください。ありがとうございます」とあります。『みんな本当に親切で、ありがたい』と父は話していました。先日会いに行ったとき父が、『段ボール、段ボール。オロナミンC、50本入れて、病棟で看護師さんが飲めるように』と頼まれました。気持ちだけですが、感謝をこめて」とあり、さらにカードをめくると、飲み物の写真がたくさん貼ってありました。品物はお断りしたので、その代わりに娘さん手作りのカードが届いたのです。それを見たスタッフ

も私も胸がいつぱいになり、私は永田さんに一言お礼を言いたくて部屋に向かいました。部屋には奥さんと娘さんがいて、永田さんの手を握って共に過ごしていました。私がカードのお礼を伝えると、娘さんは目に涙を浮かべて、「段ボール、段ボール…、このカードにある言葉が父との最後の会話になりました」と話してくれました。私は意識が薄れている永田さんに、「ありがとうございます」と声をかけました。永田さんの閉じたままのまぶたがパチパチと動き、「お父さん、聞こえているね」と奥さんと娘さんが声をかけていました。永田さんはその日の夜中、旅立たれました。

私は今回このカードをいただいたことで、コロナ禍で面会を制限している中でも、看護師たちが患者さんや家族の心に届く看護を提供してくれているのだと実感しました。そして何よりも、感謝の気持ちを精一杯表してくれた永田さ

んやご家族から、ドリンクを飲んだ時以上に元
気と癒しをいただいたのです。

Episode

33

温かい言葉

(経験年数20年)

訪問看護ステーションで勤務しています。

先日、スタッフからコロナウイルス陽性者が出たと同時に、他スタッフから濃厚接触者が出ました。

訪問予定だったご利用者様に、スケジュール変更(担当者変更、時間変更)の旨をお伝えしつつ謝罪をしていきました。

その中で、週2回訪問させていただいているご利用者様のご家族に電話した際、温かい言葉をいただきました。

「謝らないでね。誰が悪いわけでもないから。あなたたちの体が一番心配。利用者の心配も大事だけど、あなたたちも自分の体のことを一番考えるのよ」と。

こちらのことを思ってくれた温かい言葉に「人って温かいな」と思いました。

この言葉に、疲れも一気に吹き飛び乗り切ろう!!という気持ちになりました。

Episode

34

6人でワクチン

(経験年数28年)

「看護師さんの医院はどうしてワクチンやらないの?」。去年の5月頃何人かの患者さんから聞かれた疑問でした。「あのね…」。言い訳や理由は沢山ありました。医院のスタッフは医師1人、看護師2人、事務2人で今まで1人も欠けずに感染対策を行ってきました。すでに一般診察と発熱外来を時間で分けて行っていました。院長方針でかかりつけの患者さんをおろそかにしない為に今はワクチン業務は見送ろうという事になっていました。しかし私達が先にワクチンを終えてからは、もう待ったなしの状況にあつたという間になっていました。5人のスタッフでワクチン業務を行うには工夫と準備が重要です。普段休みのサポートを行ってくれている控えの看護

師も出動です。新薬の取り扱い、救急時の対応、具体的な役割分担、実際の時間配分など細かい所にも思いを巡らせて話し合い詰めていきました。あとワクチンの予約は電話予約の他に対面でも行い、患者さん一人ひとりにオリエンテーションと予診票の記入の説明、介助を行いました。案内上のワクチンナビの利用、パソコン、スマートフォンを使える方は実際多くはありませんでした。院長は日頃からその患者さん達のケアを忘れずに考えて実践していました。その為スタッフもいつもの様に取り組み対応、介入を行っていました。老年期だけでなく、対象が12歳以上になつた時も窓口を広げてワクチン業務を行いました。そして安全に行える方法として午後の診療一時間前、つまり昼休みの一部をワクチン業務に利用しました。

患者さんからは「近くで出来て良かった」「いつもの先生、看護師さんにしてもらって安心だっ

た」「本当にありがとう」と感謝の言葉を頂きました。

私達のワクチンの提供は極々一部に過ぎないかもしれませんが。ただ数々の書ききれない工夫と患者さん達のご協力の元、無事に行えた371名のワクチン接種は尊い業務だったと思っています。現在も3回目のワクチンにチーム力を合わせ取り組んでいる最中です。

看護師で良かった
o(^o^)
(経験年数30年)

コロナ禍初期の頃、面会禁止でも良いので施設での看取りをお願いしたいとご家族さまから希望がありました。ご家族さまが納得されていても、看護師としてそれで良いのか？と悩みながらの、これまで経験したことがない、ご家族さま不在の看取りケアが始まりました。面会禁止とはいえどもどうにかご家族さまに会わせてあげたい。でもウィルスの特性も明確になつていなかった時期、施設全体の感染管理・安全管理上リスク回避は必須。悩んだ末、状態が安定している時に外気浴をしていただく計画を立てました。施設の外で少し離れたところからご様子を見ていただけるよう、ご家族さまにご相談し皆さまで来所していただくことになりました。

まだ小さいひ孫さまが「おじいちゃん」とお声をかけるととても穏やかな表情をされ、ご家族の皆さまをじっと見守っているようなご様子でした。そして写真撮影。「マスク外して撮りたいね」「それは駄目だよ」「仕方ないよ。会えただけでも有り難いよ」という息子さまとお孫さまの会話を聴きながら、会えるのはこれが最後かもしれない、ご家族さまの思いを何とか叶えて差し上げたいという気持ちに。「マスク外しましょう！でも絶対に声を出さないでくださいね。飛沫は駄目ですから」とお声をかけました。まだ幼いひ孫さまも声を出さずに我慢。「はい、チーズ！」。カメラの向こうに見えた、とびきりの笑顔のご家族さまたちの表情に、コロナ禍で疲れきった心と身体が「一気に癒され、「まだまだ私、頑張れるぞ！」とたくさんの元気をいただきました。どんなに大変な状況の中でも、私たち看護師は、患者さまやご家族さまの笑顔のためな

ら頑張れる。コロナ禍だからこそ、看護師をしていて良かったと感じることができた一場面でした。

Episode

36

あー

(経験年数6年)

COVID-19が流行して約2年、当初は治療法もワクチンも確立されていない未知のウイルスとの遭遇であり、看護ケアを行っている時にもし自分がかかってしまったらどうしようという恐怖感も覚えました。

しかしこのような状況下でも私たち看護師は、患者が少しでも元の生活に戻れるように、命を繋ぐための看護ケアを実施していました。

その中で家族より「患者に会いたい」という希望がありました。感染対策上直接患者と面会することは難しい状況のため、オンライン面会を実施し、画面越しではありますが患者と家族を繋げることができました。その時に家族から「本当にありがとうございます」と言われ、家族の嬉しそうな姿を見ら

れたことに喜びを感じ、安心しているのが伝わりました。また患者も安心している様子が伺えました。普段は普通に行われていた面会がコロナ禍というこ
とでできなくなっており、何かあった時に後悔するの
ではないかと思う家族も少なからずいる状況であ
ると考えられます。今回患者と家族の反応を見て、
画面越しであっても会えたことで家族との繋がりの
大切さを改めて感じることができました。

また看護師として患者と家族の繋がりを大切に
し、患者の不安を少しでも取り除けるように今後
も日々のケアに活かしていきたいと思いました。

Episode

37

One For All,
All For One (経験年数10年)

私は精神科病院に勤務しています。コロナ禍の
昨今、精神科病院だけでなく一般の病院、あるいは
特養などの施設も面会はZOOMであったり、外
出・外泊は制限されていると思います。そのような
中で、もし患者さんが新型コロナウイルスに感染したら、ス
タッフによるウイルスの持ち込みということになる
ので、そういった意味も含め緊張感を持って日々生
活しています。不要不急の外出をしないことはも
ちろんですが、通勤時の公共交通機関の利用はや
むを得ないところです。マスク着用や手洗い、うがい
の励行で先ずは自分自身を感染させないことが重
要であると考えます。誰もが雇いたくて雇ってい
る訳ではない。それでもいつ誰が、何処でウイルスを
もらってもおかしくない今、私の勤務している病棟

では「ひよっとしたら」と思ったら報告し、通院・検査を行っています。検査の結果、感染していても、していなくても責める人はいません。また、勤務交代によって、休みから勤務になっても文句を言う人は誰一人としていません。「1人は皆のために、皆は1人のために」をスローガンに最高のチームワークを発揮できている病棟だと思えます。社会人として、体調を崩し仕事を休むのは、申し訳なさや責任を感じてしまうものです。しかし、勇気を持って言うこと、そしてそれを同僚でフォローすること、その関係が重要だと考えます。このことは自分を守り、他者を守り、結果として患者さんを守ることに繋がっていると思います。

Episode

38

ひふみ

(経験年数10年)

「居心地の良い場所であり続ける」ことを目標に私は、デイサービスセンターと生活介護で働いていました。利用者にとって、ボディタッチや表情を分かりやすく表現することは必要だと思っていました。しかし、コロナ禍になり、ソーシャルディスタンスやマスク着用、非接触が勧奨されました。まずは、マスク着用です。高齢者にとって、「マスク」は「風邪をひいた人がするもの」というイメージが強く、「風邪をひいていないから、しない」「顔がみえないから、外しなさい」と言われることが、度々ありました。その都度、説明し、マスクを着用して頂きましたが、「マスクをして下さい」と言われ続ける利用者のことを考えると、胸が苦しくなりました。次は非接触です。勤めていた施設では、握手を求める利用者が多く、今ま

でしていたことを「今は出来ないんです」と方針をかえるのも大変でした。肘をつき合わせたり、肩を合わせたりする方法を提案し、非接触を勧奨しながらもボディタッチに近い形で、安心感を感じてもらえるように努めました。最後はソーシャルディスタンスです。今までは、椅子をくつつけて円になったり、集まって行っていました。少しずつ距離をとるようにし、アクリル板を設置していききました。利用者に説明し、実施していききましたが、どこまで理解し、納得していたかわかりません。私達職員は、利用者の感染リスクを減らす為に行っていたのですが、それが本当に利用者にとって良いことだったのか。今でも悩みながら行っています。利用者の居心地の良い場所であり続けることが出来たのか考えながらその時、その場で出来る最大のサービスと感染防止を行っています。そして、それはまだ続きます。またいつの日か、握手をしたり、マスクを外して笑いあったりしたいと思います。

Episode

39

あんみつ姫

(経験年数20年)

「コロナ禍の看護師の頑張り」。当院では、コロナ病棟担当の看護師が患者の対応をしている姿をみると頭が下がった。私は外来勤務であるが、ここでのコロナ感染予防はマスクを必ずはめる。患者に対応する時はフェイスシールドを装着。診察室、処置室、器械、物品類などをこまめに除菌剤で拭く。休憩時の食事の時は間隔をあけて座り、会話せず食べ終わつた後は除菌剤で拭く。PCR検査は多くの患者が行っていた為、その対応等は頑張っていた。病院職員や地域の職員、地元の方などにコロナワクチン注射を受けて頂く時の準備等は多くあり、注射の準備、注射後の15分間の待機場所の準備や準備後の清掃など、自分の担当科の合間に業務を行っていたので皆努力していたと思う。看護師は日々時間

頑張つて行けばよいのではないかと思つている。

に追われる業務が多くあり、一生懸命に一杯頑張つていても、世間の評価は低いような感じがしていた。しかし、コロナ禍になりテレビなどマスメディアでコロナに感染した人の精神的援助、治療、食事介助等、一生懸命関わっている看護師の頑張りを多く放送して頂き、陰ながら頑張っている職業があることを世の中の人達にも知つて貰えてとてもうれしく思つた。また、病院の中で勤務している人が何らかの原因でコロナにかかつてしまい、病気になった人しかわからない辛さがあったと思つたが、コロナにかかった人もかからなかった人も言葉の選び方の難しさを感じとつている。どちらにも悪くないが、お互いの言葉に苛立つたことがあると思つた。コロナ感染が取り上げられてから2年が経過した。いろいろな情報を得て、それぞれが、皆いろいろな工夫を行つてきたと思つた。いつか収束するだろうと願つているが、中々収束しない。まずは、いつかはコロナ感染が収束することを願い、今は看護師として自分が出来ることからこつこつと

菅原 朝子

(経験年数12年)

2020年2月。「クルーズ船内の陽性患者を

受け入れる」旨が知らされた。感染症患者も担当する病棟に勤務しているとはいえ、世界中を騒がせる新型コロナウイルスに、自分たちが対峙することになるとは思わなかった。当時はまだ現在ほどウイルスの特性が解明されておらず、10年以上看護業務に従事していても、恐怖や不安を拭き去ることはできなかった。SPO2モニターや体温計、防護服、N95マスクといった医療資源も十分でなく、病院内外からかき集めなければならなかった。

私が最初に担当したのは、クルーズ船乗客のアメリカ在住の女性A氏だった。日本語がまったく通じず、コミュニケーションが取れない。食事についてもスムーズにはいかなかった。A氏は「病院の食事を食べ

るくらいなら、毎食オートミールを食べたい」と訴えた。慣れない国の病院で外国人に囲まれながら、慣れない日本食を摂るのはさぞかし辛いだろう。私は、言葉の伝わらない、生活の異なる患者にどのように寄り添えばいいのか毎日思索した。

拙くてもどうかコミュニケーションをとろうと、帰宅してから英語の勉強をすることにした。タブレットも用い、身振り手振りも交えることで、少しずつこちらの意図が伝わるようになった。食事についても栄養士と相談し、朝食にコーヒートフルーツをつける等の対応を行った。食事が功を奏したかはわからないが、A氏は体調も改善し、笑顔が見られるようになってきた。

当時は陰性が2回確認できなければ退院できなかったため、A氏の入院期間は長期に及んだ。2度目のPCR検査結果を、私はA氏と共に固唾を吞んで待った。結果は陰性だった。涙を流して喜ぶA氏を見て、私にもこみ上げるものがあった。晴れて

陰性となったA氏の希望は、「買い物に行きたい」。医師の許可を得て、病院内の売店へと付き添った。2週間ぶりの、病棟の外である。A氏が手にしたのは、コーラとサンドウィッチだった。

～生命(いのち)・自律・情熱～



公益社団法人 神奈川県看護協会

〒231-0037

神奈川県横浜市中区富士見町3-1

神奈川県総合医療会館

TEL 045-263-2901

<https://www.kana-kango.or.jp/>

